



Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

ホームページもご覧下さい。http://www.amsl.or.jp

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@ryukyu.ne.jp



## ●成長とともに姿を変えるヒトデ ーマンジュウヒトデー

2001年の秋から大発生し始めたオニヒトデは、ダイビング協会の人達の駆除活動のおかげもあって、いくらか減ってきたようですが、今でも場所によっては、まだたくさんいるようです。ヒトデの仲間は、「人手」と言うくらいですから、5本の腕(「足」と呼んでいる人もいます)をもつものが多いのですが、オニヒトデは10本以上の腕をもっています。そして、その反対に腕がないように見えるヒトデもあります。今回は、そのヒトデの仲間、マンジュウヒトデをご紹介します。

これまでマンジュウヒトデは、阿嘉島のまわりでは、ごくたまにクシバルの礁池の中で見つかるくらいで、あまりたくさん見かけることはありませんでした。ところが、去年の夏、マジノハマで潜っていて、2-3個体のマンジュウヒトデを見かけることができました。また、クシバルの礁池でも2個体見ました。本当に以前は見

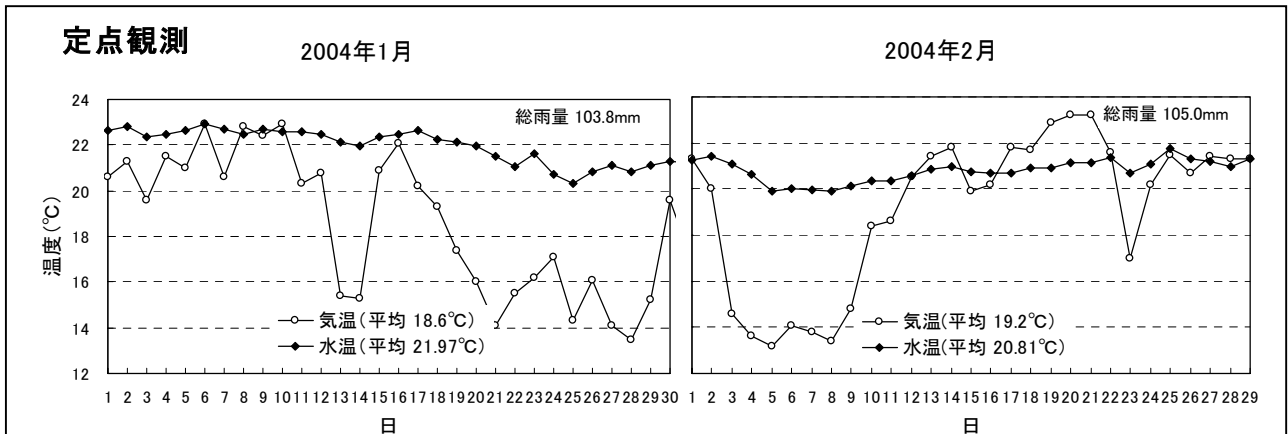
ることが少なかったのですが、数が増えているのだらうと思います。

マンジュウヒトデとは、うまくつけた名前で、本当にまんじゅうのような球形をしています。大きいものでは直径が20cm以上あり、海底にでんと居座っています。マンジュウヒトデの腕は、どうなってしまったのでしょうか。ぱっと見ただけでは腕がないようですが、ひっくり返してみると管足(先が吸盤かんそくになっていて、水の出し入れで伸び縮ませることのできるヒトデの本当の足)の列が、中心から外に向かってちゃんと5本伸びています。つまり、マンジュウヒトデの腕はなくなったのではなく、それぞれとなりの腕とつながって体と一つになってしまったのです。

先ほどお話したマジノハマで見つけたマンジュウヒトデは、まだ小さく若い個体でした。実は、小さい頃のマンジュウヒトデは、ちゃんと5本の腕をもっていて(といってもイトマキヒトデのように出っばっているだけですが)、体の高さも低く、とても「マンジュウ」ヒトデには見

写真1





えません。写真 1 の個体は、左の小さな個体が幅約 8cm で、右の個体が約 11cm です。このように、だんだんと成長するにつれて、腕の出っぱりが目立たなくなり、体の高さが高くなって(写真 2:左の個体の高さは 2.5cm ほどで



すが、右の個体は 6cm あります)、やがて「マンジュウ」になるのです。マンジュウヒトデは、進化の歴史の中で変わってきた姿を、個体の成長の中で再現しているのかもしれない。

ところで、マンジュウヒトデは、何を食べて成長するのでしょうか。採集してきたマンジュウヒトデを研究所の大水槽で飼育していたところ、一緒に入っていたキクメイシサンゴを食べていました。図鑑にも「ミドリイシやハマサンゴが好物」と書かれています。マンジュウヒトデも、オニヒトデと同じようにサンゴを食べるヒトデなのです。大発生することが少ないためか、マンジュウヒトデが原因でサンゴが死滅したという話は聞きませんが、サンゴの天敵であることには違いありません。とは言え、オニヒトデのあの凶悪そうな外見と違い、まん丸い愛きょうのある姿を見るとなんとなく憎めないのが正直なところでは

## ● 阿嘉島の海より

昨年の夏に発行した「アムスルだより 62号」でパラオの国際サンゴ礁センターとそこから阿嘉島に研修に来た研究員の話を書いたのですが、覚えているでしょうか？先日、そのパラオ国際サンゴ礁センターに行ってきました。目的は東京農工大学などと共同でおこなっている研究に必要な生物を採集することでした。

62号でパラオは歴史上日本とは関係が強く、阿嘉島の人にも馴染みのある国であることを紹介しましたが、今回はじめてパラオを訪れて、日本語があふれているのにビックリしました。街の中を車で走ると日本語で書かれた居酒屋やレストランの看板がいたるところで見られましたし、スーパーでは日本の商品がそのまま売られていました。車なども、日本から中古車を運んできてそのまま使っているようで、トラックが「左に曲がります」という音を出しながら左折して行きました。

慶良間の海とパラオの海では地形がまったく違うのですが、さすがに魚の多さには感動しました。ただ、サンゴについては、数は少なくないのですが、どの種類も単調で似たような色のものが多く、やはり慶良間のサンゴの方が美しいと再確認して帰ってきました。